ベトナム図書館開発の現在
―INASPの活動から―

前嶋淳子

ベトナム旅行の楽しみは、なんといっても買い物、という向きも多いのではないだろうか。近年ベトナムでは、高水準のインフレが続いているが、折からの円高も手伝ってか、お得感は依然として強い。例えば、図書一冊の価格は、日本の五分の一から一〇分の一といったところだ。書店を覗いてみても、稀に一〇万ドン（約三六五円）を超える商品を見掛ける程度である。

ベトナムの物価を基準にすれば、一〇倍もの値段がする日本や欧米の出版物は「高級品」。収集には、さぞかし苦労されていることだろう、などと要らぬ心配をしつつベトナムの図書館を訪れると、少々驚かされることになる。欧米の図書や学術誌、電子ジャーナルなども揃えている図書館が、いくつもあるのだ。欧米の学術誌や電子ジャーナルといえば、日本の図書館でさえ、その価格高騰に手を焼いている代物。物価水準の低いベトナムで、どうやってその費用を工面しているのだろう。

実のところ、ベトナムは、この分野の代表的な被援助国のひとつである。この分野とは、開発に必要な学術情報へのアクセス向上を支援する、国際開発の一分野のことだ。古くはユネスコの世界科学情報システムUNISIST（一九七三年発足）などが知られている。近年は、電子情報に重点を置くプロジェクトが増えており、代表的なものに、医療情報の南北格差解消に取り組むWHOのHINARIや、農学分野を扱うFAOのAGORAなどがある。ベトナムは、これらのいずれにも参加しているほか、学術情報全般を対象とするイギリスの慈善団体「科学出版物入手のための国際ネットワーク（INASP）」のパートナー国でもある。以下では、多彩かつ包括的な取り組みで知られるINASPのベトナムにおける活動の一端をご紹介しよう。

まずは、高額な電子ジャーナルをどうやって購読しているのか、という点である。INASPをはじめ、多くのプロジェクトが、出版社との交渉によって、途上国への商品の無償提供、或いは、大幅な値引きによる購読契約を実現している。ベトナムもこの恩恵に浴しているのだが、「ベトナム固有の情報ニーズは、ベトナム自らの手で充たせるように」との趣旨のもと、スキルを備えた図書館員を育成し、図書館開発に乗り出すところに、INASPの特徴がある。

最初は、ベトナム代表チームを結成し、INASPのサポートの下、国全体で一つの契約を結ぶことから始める。これが軌道に乗れば、次は、専門分野を同じくする図書館がコンソーシアムを作り、それぞれのニーズに合った契約を目指す。最後には、個々の図書館が、自ら最適な契約方法を選択し、実現できるようになることを目指す。この段階を経るに従って、INASPが育成した代表チームのスキルは、個々の図書館へと順々に伝授され、INASPは交渉の場からフェードアウトしていく。

ベトナムは現在、第二段階あたりにいるようで、二〇一〇年末には、INASPなどの支援により、経済学図書館のコンソーシアムが誕生している。当初は無償で商品を提供してくれた出版社も、ベトナムの開発が進み購買力が上がれば、値上げを要求してくるだろう。いかにして情報へのアクセスを確保していくか、ベトナム図書館が真価を発揮するときが、着々と近づいていると言えるだろう。

また、このようにして世界の学術情報へアクセスすれば、そこから新たな学術情報が生まれる。それを世界中からアクセス可能にし、世界の学術コミュニティに貢献して初めて、情報のサイクルは完成する。ベトナムからの学術情報の発信も支援していることは、INASPのもう一つの特徴である。中でも注目される取り組みが、ベトナムの学術誌を電子ジャーナル化して提供するVietnam Journals Online（VJOL：http://www.vjol.info.vn/）だ。二〇〇七年に正式公開されたこのサイトには、現在、一三誌、三千本超の論文が掲載されている。

ベトナム固有の言語であるベトナム語の学術コミュニティの中心として、自国の学術情報を収載したVJOLのようなサービスを、ベトナム自身が主体となって構築してゆくことの意義は大きい。その点、現在の収録雑誌数は、現地の出版状況に照らすと、甚だ少ないと言えるだろう。これには、ベトナムにおいては、様々なかたちでの情報発信が、既に活発に行われている、という事情もあるようだ。多くの学術誌が自前のウェブサイトを持ち、雑誌記事データベースも複数存在している。先行するこれらとうまく連携し、ベトナム学術情報の総合案内所へと昇華していくこともまた、これからのベトナムの図書館に期待されるところである。

（まえじま　じゅんこ／アジア経済研究所　図書館）